

■今月の特選句

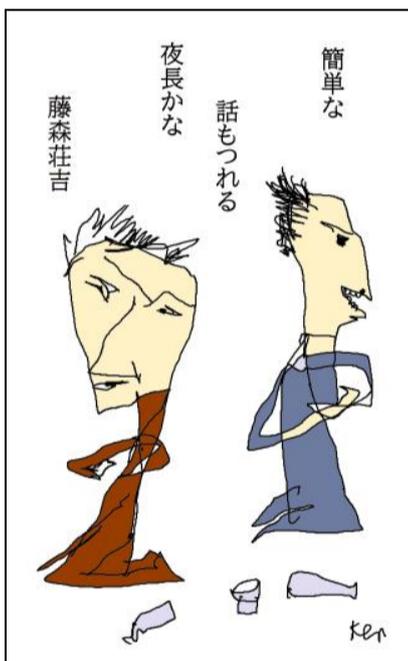
2021年11月



ピーマンと不仲の兄や唐辛子

岡田廣江

お前たちは元々兄弟なのだ。DNAが同じだ。見た目は異なれど、それぞれに良さがある。喧嘩両成敗だが唐辛子に辛い点をつけさせてもらうぞ。



簡単な話もつれる夜長かな

藤森荘吉

「夜長」は豊かさのあるプラスイメージの季語。しかし、現実には時間的余裕があるばかりに、めんどうな展開に。「厄介な話をするなら短夜に」。



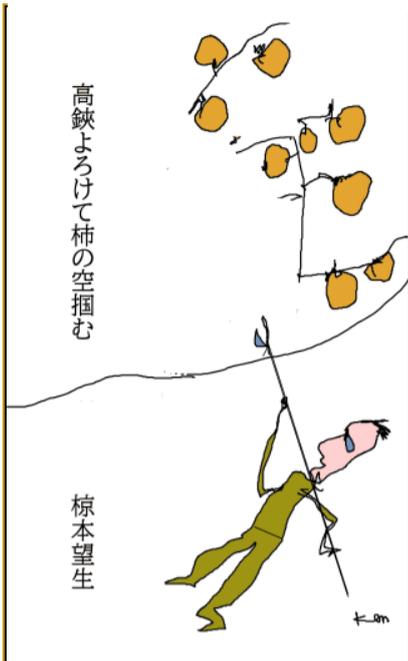
似て非なる余命と余生敬老日

田村米生

余生を楽しもうと思っていたら、余命いくばくもないということもある。かと言って余命だけを気遣う余生というのも情けない。

■今月の特選句

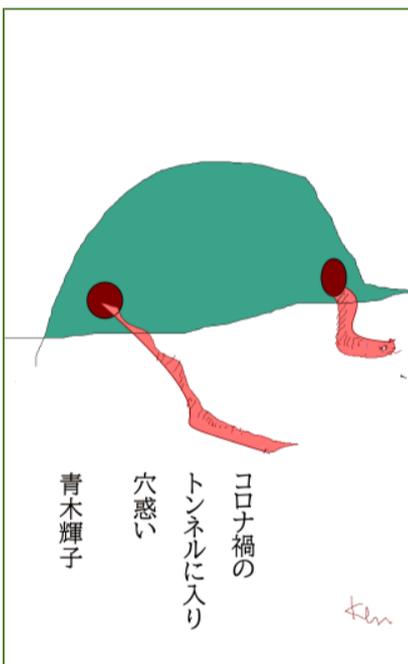
2021年11月



高鉞よろけて柿の空掴む

椋本望生

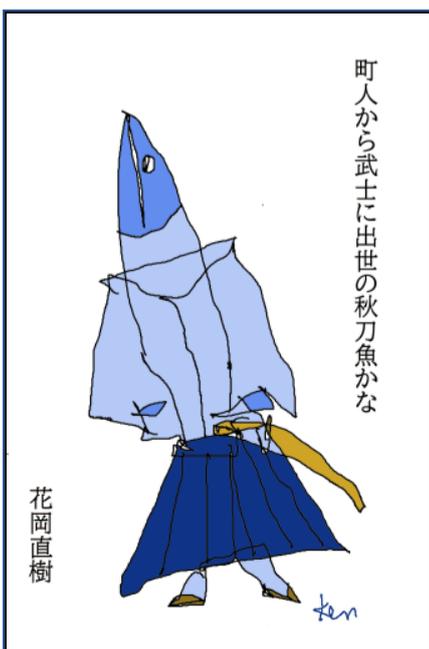
高鉞は使い方が難しい。何事も経験がモノを言うんじゃ。逆光はいかん。爺のやり方を見ておれよ。おととと、柿を採り損ねて空を掴んだわい。



コロナ禍のトンネルに入り穴惑い

青木輝子

ほほう、これは新型の穴だな。探した甲斐があるというものだ。あれれ、この穴は奥が深いぞ。ああ、新型コロナのトンネルか。どうりで先が見えん。



町人から武士に出世の秋刀魚かな

花岡直樹

皆の者、控えおろう。店頭で秋刀魚様がお出ましじゃ。これまで食い散らかされて辛い思いをしたが価格も高騰、今や目黒の秋刀魚の名に恥じぬ。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

裂け目より地球を覗く椿の実 ・・・覗かれてると気付かなかった	小泉和子
口下手のゆび先上手に梨を剥く ・・・お喋りさんは皮厚く剥く	壽命秀次
同居する息子夫婦は栗ごはん ・・・爺と婆にはマロングラッセ	赤瀬川至安
生身魂資格試験のありさうな ・・・試験に落ちて若いままです	井野ひろみ
伊予伊予に色づいて来し伊予蜜柑 ・・・果汁の甘さ汁人ぞ汁	金城正則
人類は土足で月の面汚す ・・・靴脱いだとて足の汚し <small>キツナ</small>	小林英昭
熱の児にちょっかい出す姉猫じゃらし ・・・喧嘩相手がいないとさびし	石塚柚彩
天海の島見当たらず秋の空 ・・・温暖化にて水没したか	山下正純
涙目が紅葉の散るを見て戻る ・・・散りゆく紅葉にわが身を重ね	井口夏子
皮むきのご褒美ですよと栗ご飯 ・・・梨の収穫ご褒美はナン	山内 更
我が庭にロックンローラーくつわ虫 ・・・タップダンスの踵を鳴らし	浜田イツミ
新米の違い分らずカレー掛け ・・・米もコックも新米だべな	伊藤浩睦
ここだけの話にしてねお月様 ・・・口止め料を月々払へ	鈴鹿洋子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

蠟燭や無月の闇を煌々と	相原共良
浪曲の語尾の長々赤とんぼ	相原共良
色鳥のソプラノ杜をはなやかに	相原共良
台風の置土産してドロンする	青木輝子
敬老日七十代はまだひよ子	青木輝子
青虫を燃やせるゴミには出せません	赤瀬川至安
腹筋と青竹踏みを敬老日	赤瀬川至安
裏返る蜻蛉をそっと裏返す	井口夏子
鰯雲鰯は干物になったとき	井口夏子
薔薇とたこ焼狭間で揺れる乙女心	池田亮二
今日ばかり若作りやめ敬老日	池田亮二
家計簿はボケ防止なり夜長夫	石塚柚彩
豊作に笑顔米価に心配顔	石塚柚彩
初もみぢみんなが知つてゐる秘湯	伊藤浩睦
名月や安き飲み屋に蟹のあり	伊藤浩睦
退屈にみせて案山子の肩に鳥	稲沢進一
マスクして感情不明のサングラス	稲沢進一
人の名を思い出せずや敬老日	稲沢進一
絶対音感しか知らず秋の虫	稲葉純子
初秋刀魚の煙に鼻腔擦られ	稲葉純子
鳥達の三密監視過疎の案山子	稲葉純子
小さくても痒さは劣らず秋の蚊よ	井野ひろみ
無人レジ未だに慣れず秋暑し	井野ひろみ
紫蘇の花刺身に散らせば幸せホルモン	上山美穂
早生みかん私をシャキーンと目覚めさせ	上山美穂
スマートフォンでプレゼントせむ名月を	上山美穂
秋の暮灯台びかびか何か言ふ	梅野光子
初孫を乗せる小春の乳母車	梅野光子
風にひと揺れ衣桁の秋裕	梅野光子
軍服をミシンが記憶破蓮	遠藤真太郎
同性婚の一夫多妻へ流れ星	遠藤真太郎
放屁虫逃げるが勝ちのネオン街	遠藤真太郎
手の甲にぬくみを伝え秋の蠅	大林和代
かさの雫切ればおどろく草の花	大林和代
気にしないコスモス園をこぼれ咲く	大林和代
雨樋のはづれてをりぬ鰯雲	小笠原満喜恵
赤とんぼ十四階を悠々と	小笠原満喜恵
コロナ禍にお家飲みなる月見かな	小笠原満喜恵

枯草色の目ん玉にらむ枯蟪蛄	岡田廣江
啄木鳥の連打赤しゃっぽ脱げそうな	岡田廣江
噓して言ひたき事は引つ込めぬ	北熊紀生
台風や天気図いつもの顰(しか)め面	北熊紀生
紅葉や石鎚山のでつぺんに	金城正則
鳴き過ぎて舌禍となりぬアホウドリ	金城正則
いぼむしり終の棲家は厠横	久我正明
秋の雲キリンの首を甘く締め	久我正明
白蓮のやうに恋していぼむしり	久我正明
鬼の子に究極となるかくれみの	工藤泰子
踏み留む一本足の案山子かな	工藤泰子
秋の雲ぼあんぽああんふはふはり	工藤泰子
人生はあつといふ間よ草の花	桑田愛子
正義とは剃刀のごと水澄みて	桑田愛子
月煌々鰯は夢を見ておるか	桑田愛子
虫の夜とろりとろとろ湯浴かな	小泉和子
新人の案山子加はる婆の畑	小泉和子
どぶろくに祭をつけて無礼講	小林英昭
悠然と天下睥睨鬼やんま	小林英昭
鳳仙花そつと触るもはじけたる	佐野萬里子
台風の余波鳳仙花ひねくれて	佐野萬里子
法師蟬聞きつつ甘藷の蔓めくる	佐野萬里子
虫時雨コロナ禍無念独り酌む	壽命秀次
稔田のドミノ倒しのホシは風	壽命秀次
鶏頭や昔ツッパリ今社長	白井道義
百万本数へてみたき秋桜	白井道義
仇討ちのやうに秋の蚊打たれけり	白井道義
蛤の横に雀の羽根散りぬ	鈴木和枝
「休業」ピタリ貼りついて秋の雨	鈴木和枝
コウロギ語を解くと気使いだった	鈴木和枝
夜通しコウロギに問いかけられる夢って何	鈴木和枝
金栗と呼ぶ山栗の味の濃し	高岡昌司
秋桜は海までも空までも	高岡昌司
紅葉のまゆみ唇のかたちして	高岡昌司
温暖化長寿となりて秋の蠅	高田敏男
斎場の残り火ゆれて蚯蚓鳴く	高田敏男
元気良く真っ赤にもえて死人花	高田敏男

遠回りしても走つても木犀香
 明月や兎何処に行つたやら
 蚯蚓鳴くもしや耳鳴りかもしれぬ
 満月と団子の丸さ比べかな
 毒茸の博士にいまだ嫁の来ず
 真打(とり)の無き主座争ひや秋の乱
 西成の体質抜けず曼珠沙華
 虫の音や己の感性に生きる
 どなたにも潜める殺意とりかぶと
 泥臭き歌詠み山に笑はれる
 慈悲心鳥啼くが嬉しく鋏止める
 生身魂滑稽などは縁遠く
 コスモスを二本おまけでルララララ
 入園の募集そろそろどんぐりや
 十五夜はうさぎになろうかオオカミか
 ばつた飛ぶオリンピックであれば金
 水槽が狭いと秋の金魚かな
 鶉の一団一段と賑やかに
 霧の湧くところに生まれ下り鮎
 秋なのか副反応か食の湧く
 身に入みる談志の本懐芝浜は
 口裂け女思い出す木通かな
 付度てふ胡麻をする人ばかりなり
 ススキなどなくてもお団子頬ばつて
 一羽の小鳥朝焼けの景のなか
 涼しさについつい忘れサンカット
 爽やかや投げ打ち走るショウヘイショウ
 スカイツリー仰ぎつぶやく秋だなあ
 振り売りの声呼び止める新豆腐
 失恋の胸に刺さるや赤い羽根
 鍋底に隠れていたかきりたんぼ
 自転車で走り去る背や薄紅葉
 抱かれて何時からこの径(みち)秋彼岸
 寝覚めては枕時計の夜長かな
 竜淵に潜む獲物に見透かされ
 吟行や柿なる寺を梯子する
 鰯雲にビールが熱いラブコール

高橋きのこ
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 竹下和宏
 竹下和宏
 竹下和宏
 田中 勇
 田中 勇
 田中 勇
 田中 勇
 田中早苗
 田中早苗
 田中早苗
 谷本 宴
 谷本 宴
 谷本 宴
 田村米生
 田村米生
 月城花風
 月城花風
 月城花風
 土屋泰山
 土屋泰山
 土屋泰山
 坪田節子
 坪田節子
 坪田節子
 飛田正勝
 飛田正勝
 飛田正勝
 長井知則
 長井知則
 長井知則
 西をさむ
 西をさむ
 西をさむ
 花岡直樹
 花岡直樹

コオロギをキャンディーとして商品化
 炭坑節唄ひつがれて月今宵
 風船蔓一分の隙もなきお方
 神の旅弁天様を誘ひ発つ
 稲刈りや薬缶に替るペットボトル
 里芋の皮か野獣の皮膚なのか
 海賊船ぬつと出さうな霧の海
 もろもろをまあるく収め今日の月
 長き夜やその話もう三回目
 森を見ず木を見てをれば初紅葉
 咳一つ出来ぬ世間に誰がした
 ファッション化個性丸出しマスク顔
 喧しや椋鳥達の座談会
 輝きし新米梅干ひとつ置き
 さわるなど祖母が言っていた彼岸花
 禿頭の夫と観賞今日の月
 蓮の実飛ぶ残る実ずつと引きこもり
 露の世に古着生き延びヴィンテージ
 蔵書てふ二度読まぬ本秋灯し
 息止めてそのままじつと十三夜
 個別面談大きめのマスクして
 脇役にあらず主役の袖しづく
 銀杏の光沢箸で捉えたる
 足裏で稲株とらえ刈田行く
 反戦の唄を奏でりちろ虫
 尺蠖の女盛りを告げにけり
 心太引くも進むもあなたかな
 牛の尻居並ぶ丘や天高し
 式部の実今が余生と自問する
 桐一葉たちまち乾く洗ひ髪
 たいそうな毬に守られ小粒栗
 団栗のこつんと開く新世界
 楓かなちがうよちがう河童の手
 蒸かし藪割つて甘さを剥きだしに
 秋の声聞き分けてゐる地獄耳
 翺雲数へ始めてすぐ挫折

浜田イツミ
 浜田イツミ
 久松久子
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 日根野聖子
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 南とんぼ
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 向田将央
 向田将央
 向田将央
 村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 百千草
 百千草
 百千草
 森岡香代子
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健

あと二個で飛べる風船蔓かな
 ハロウィンや神職の子ども寺の子ども
 行く秋や太らせるだけ太らせて
 獅子舞や六十歳の青年団
 SFの宇宙の都市や花八手
 茸採り親子に秘密生まれたる
 冠を正すものなし葡萄園
 常備薬は百薬の長月見豆
 八寸の膳の脇役菊脛
 長き夜の聴き放題のベートーヴェン
 大なまず地下で寝ている防災日
 金色のシャワー降る夜十三夜
 手のひらのスマホの中の月へ跳ぶ
 秋祭り宮司神事の町めぐり
 早生みかん若気の至りの香りして
 腫れものにさわるがごとく桃に触れ
 窓枠が額縁となり夜半の月
 無花果の食感オノマトペにできず
 秋涼し何時頃かと思いきり
 子ども傘ほどの葉が揺れ秋の庭
 鉢植のデラウェアを不思議がる
 新米の匂いが亭主を早起きに
 マンションの灯りちらほらちろろ鳴く
 長生きを占つてみる卒寿の秋
 跳ねたがるものを宥めてゴマを擦る
 その色を重ねるたびに秋深む
 強情が皮に出でたる秋茄子
 礼服の浮かぶ瀬もあり秋深む
 敬老の賜はる羊羹厚く切る
 雪囲ひむかし語りの爺と婆
 満月へ五輪の赤字積み上げる
 餅菓子のその香は桜紅葉にも
 滝雲の裳裾引きずり龍田姫
 糸瓜(いとうり)と書いてもへちまの太りけり
 案山子とて世代交代縞のシャツ
 スマホデビューするも操作のできぬ秋

八塚一青
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳村光寛
 柳村光寛
 柳村光寛
 山内 更
 山岡純子
 山岡純子
 山岡純子
 山下正純
 山下正純
 山田真佐子
 山田真佐子
 山田真佐子
 山本 賜
 山本 賜
 山本 賜
 横山洋子
 横山洋子
 横山洋子
 吉川正紀子
 吉川正紀子
 吉川正紀子
 吉原瑞雲
 吉原瑞雲
 吉原瑞雲
 渡部美香
 渡部美香
 渡部美香
 和田のり子
 和田のり子
 和田のり子